
もっと力があったならば それは己の弱さを正当化させる言葉である

蓮實苑

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もっと力があったならば それは己の弱さを正当化せらる言葉である

【Zコード】

N5367G

【作者名】

蓮實苑

【あらすじ】

淡々と死を目に見る主人公。加速する狂氣。生が反転するほどのか。

もつと力があつたならば それは己の弱さを正当化せむる言葉である（前書き）

例えば、そこに遺影が飾つてあつたとします。
その遺影には女性が写っています。

それはとても美しい女性で、こちらを向いて軽く微笑んでいる様はまるで白百合のように可憐です。

けれどそれはやはり遺影で、女性はもう死んだのです。この世には居ません。あの世に居るのかは定かではありませんが。

女性の死因は、腹を刃物で切り裂かれた事によるショック死。

死体は死装束を着せて棺桶に詰めるのがかなり困難なくらい無残な状態でした。

その女性の遺影が、今そこにあります。

貴方は、それを見て一番に何を考えますか。

+++

流血、グロ（惨殺）表現有り

+++

題名はこちらからお借りしました。

「もつと力があつたならば それは己の弱さを正当化せむる言葉である」

選択式御題（<http://www.geocities.jp/monikarassu/>）

管理人 最尼花

もっと力があつたならば それは口の弱さを正当化せらる言葉である

死にたいのに死ねない人と
死にたくないのに死んじやう人は
どっちが辛いんだろうとか

身体を傷つけるのってどんな感触がするんだろう。

ずっと前から…本当にずっと前から気になっていたんだ。ある日風邪を引いて、注射をしてもらつた時から。看護師が顔色も変えずに平然と血を抜き取つたのが印象的だつた。静脈にす、と刺さつた針。とても綺麗だつた。どうして細い血管を突き破る事もせずに刺せるのだろう、と。痛くはなかつたけど、だからこそこういう行為を他人にした時、どんな気分になるのか気になつた。手術で身体を切る時とか、どんな感触が指に伝わるんだろうって。そんなことで頭がいっぱいだつた。

そんな時、この国のどこかで惨殺事件があつた。

腹は大きく切り裂かれ内臓が引きずり出された上にその内臓も微塵切り。医者の話ではその時点か或いは最初に切りつけられた時にシヨツク死していたに違ひないらしい。だがその死体の女性は手足は勿論、顔も全て、つまり全身が滅多刺しにされていたそうだ。こんなに酷い事件は他に類を見ないとニュースキャスターは語つていた。遺族は泣いていた。

その手に抱かれた遺影の女性は美しかつた。

殺人現場を想像してみた。

真赤な地面に広がる蒼白な肢体。

鉄に脂の生臭い匂い。

顔のない崩れた肉体はどんな格好だったのだろうか。やはり大の字か。それともそこまでの惨殺死体なら手も足も区別がつかないのではないだろうか。ぐちゃぐちゃに潰れ、一種のアメーバのようなかもしけない。

肉が切れる感覚。甲高い女の悲鳴。飛び散る血液に引きずり出された内臓。日の目を見ることなく一生収められているより、そんな風にして死んだほうが内臓としては嬉しいのではないだろうか。

高校、大学と所属したのはやはり医学部。人が傷ついた時の痛みについて熱心だつた。切りつけた側の感触は勿論学べるはずもなかつたがそれは毎晩ベッドの中で医学書を読みながら想像し、想像しては想像では駄目なんだという結果が出て、毎回その瞬間疲れて眠つていた。

二度目の惨殺事件があつた。

十数年も前の事件と良く似ていたが今度はまず首を切られていた。その後に体中を滅多刺しにされていたのだ。昔は気付かなかつたが、どんなにインパクトがあつても十日足らずで人々は事件を忘れるものだ。

だが自分はずつと覚えていた。

「久しぶり。少し痩せたかな？」

「え？」

目の前の人物は笑顔だ。人懐っこそうで魅力的な笑顔だが見覚えがあるようには思えない。

「え？ 忘れた？ 高校で一緒にいたんだけど」

「…え？」

気分を害したらしい顔をした知人らしき人は、未だきょとんとしている自分がおもしろくないらしく、盛大に溜息をついた後で「やっぱり覚えてない」と苦笑いをした。その知人（やはり”らしき人”にしか見えない）の顔をまじまじと見詰めると、まんざら初対面でもない顔かもしれないという気もしてきた。

「ん？ 思い出してきた？」

知人（らしき人）の苦笑いは少し明るくなり、嬉しそうだ。ころころと表情の変わる人だと思つた瞬間、少し何か頭の淵にひっかかり、どうも知つた人らしいぞと思つた。

「…あ、なんか……」

「急ぐな急ぐな。急ぐとまたすぐ忘れるぞ。急がーなーいー」

多分また忘れるとしたらその声のせいだ。

頭の中で突っ込みをいれつつも着実に思い出してきている。こいつは、高校が一緒で、会話友達止まりの知り合いだ。まあ、そうとはいつもその辺の会話友達よりは仲は良かつた筈だが。どうも思い出した事が表情にでたらしく、目の前の友人の顔は花が散らんばか

りに輝き始めた。

「思い出した?」

「まあ…うん、思い出した」

「やった」

何が「やった」なのか。だが今の自分の反応を思い返してみれば、確かに喜ぶことかもしない。

今日はどうしたのかと訊くと、田の前の友人曰く「急に会いたくなつた」とのこと。

「ほひ、よくあることじやん。虫の知らせへり言ひの?」

「……多分、違う」

「そ? 知らないけどや。こいじやん、会えてさ。嬉しいない?」

「……」

「や」はせめて頷いてよ」

なぜ、と咳くと非常にショックだつたらしく俯いてしまつた。

どうもテンポが合わない。こんな人間でも中身は全部同じなのかな。

「お前、変わんないね」

どうもわけがわからない。変わらないなどこの友人に言われたら終わりだ。

身体を傷つける事への憧れは昔から変わつていなかつた。

寧ろ、憧れはどんどん高みへと上がつていつた。

手首を切りつけてみたい、といつ程度だつた想いも。

もつともつと、全てを切り刻んだら、どんな気持だらう、どんな感觸が手に残るのだろう。

凶器？

凄惨な現場。

その中にひつそりと佇む自分。

真赤に濡れた地面に、真赤に塗れた自分。

血の匂い、脂の匂い。虚ろな黒い目をした、自分。

狂氣？

自分はどんな気分で立つてているのだろう。

虚ろなんかではなく、目的を達した達成感に溢れた鋭い瞳かもしれない。

狂喜に歪み、引き攣つた頬、喘ぐ喉。その時自分は、どんな風に笑うのか。

憧れ、狂喜。

それは、確信へ。

三度目の惨殺事件があつた。

まず頸動脈に凶器である刃物を刺し、引き抜き、次に腹。腹は大きく切り裂かれ内臓が引きずり出された上にその内臓も微塵切り。首の断面は何かで醜く抉られていた。恐らく犯人の爪だ。死体の手足は勿論、顔も全て、全身が滅多刺しにされていたそうだ。大半の傷口はやはり同じく爪で抉られ、余計に出血を酷く、組織は滅茶苦茶だつたらしい。

十数年前の事件、最近起きた事件と酷似していたが、一つだけ異なったことがあつた。

凶器を持つた犯人が、その場に立っていた。

血飛沫が上がる。顔に、身体に。血飛沫がこれでもかとかかる。意識はなかつたため、悲鳴は無い。そして頸動脈を一突きしすぐに抜いたため、ほぼ即死。凶器を通して、肉の切れる感触が手へ。そして脳へと導かれる。とんでもない快楽を覚え、思わず断面に爪立て、指をめり込ませた。ぐじゅ、ぶしゅ、と、肉が崩れる音、血が飛び出す音が聞こえた。脂で滑るが、なかなかいい。死にたてで体温は充分残っている。温かい。一頻り断面を弄ぶと、腹へと凶器をつきたてた。縦に大きく切り開くと、途端に生臭い内臓が飛び出して少し面食らつた。

『　日、未明、　　で惨殺事件が
ニュースキャスターの青い顔を想像し、笑みが零れた。

自分は、人を殺した。

欢喜に身を任せ他人の身体を滅多刺しにする。余すところのないようだ。大胆に振り下ろしながらも、慎重に、贅沢に。

一頃り刺し終え、内臓も微塵切りにしてしまつと、凶器はもういるまい。

あとは、自分の手で。

『　　日、未明、　　で惨殺事件が　　』

テレビに、顔写真が写っていた。

こんな狂ったような犯罪を考える人間は一体どんな顔をしてるのだろうかと画面をしげしげと見詰めると、それは友人だった。

「まさか…」

そんな筈は無いと思った瞬間、先ほどニュースキャスターが「凶器を片手にその場にいた」と述べていた事を思い出し、儂い望みは消え去つた。昔から、変な人だとは思つていた。

それでも、こんなこと。

いや。有り得る。普段から思つていたではないか。こいつは、何かおかしいと。

昔、話の拍子に聞いた事があった。「人を傷つける感覚つて凄いだろうね」と。

笑つて流したが、本当はずつと気にかかつっていたのだ。高校時代も、今までも、ずっと。

どうして気付かなかつたのだろう。

大学の医学部へ進学したと風の噂で聞いた時点で、すぐに会いに行けばよかつたのだ。

この間再会したのも、本当はそのことに關して何か言いたかったのだ。

だが、会つてみると何も変わつていなく、途端に懐かしくなり、なんでもない雑談をして去つてしまつた。

どうしてだ。どうして、気付かなかつた。

変わつていなかつたのは間違つていない。変わるようなら最初から心配することはなかつた筈だ。

変わらない奴だからこそ直感的に心配して、わざわざ下手な口実を作つてまで無理矢理会いに行つた。

そこまでわかつていどうして、気付かなかつたんだ。

「人を傷つける感覺つて凄いだろうね」

あの会話をしていた時点では、あいつが狂つていた事に。

死刑は決まつたも同然だ。

被害者は一人。けれどこんなにも残酷な事件で、しかも犯人の意識がはつきりとしていれば、当然の事だろう。

長く語り継がれる　　なんてことはないのだろう。
どんなに卑劣で、残忍でも、人はそう簡単に一つの事に執着できるものではない。

だからきっと、自分もあいつを忘れてしまう。

もつと力があつたならば
それは己の弱さを正当化させる言葉である

「お前、変わんないね」

もつと力があつたならば それは口の弱さを正直やむむ言葉である（後書き）

例えば、そこに遺影が飾つてあつたとします。

その遺影には女性が写っています。

それはとても美しい女性で、こちらを向いて軽く微笑んでいる様はまるで白百合のように可憐です。

けれどそれはやはり遺影で、女性はもう死んだのです。この世には居ません。あの世に居るのかは定かではありませんが。

女性の死因は、腹を刃物で切り裂かれた事によるショック死。

死体は死装束を着せて棺桶に詰めるのがかなり困難なくらい無残な状態でした。

その女性の遺影が、今そこにあります。

貴方は、それを見て一番に何を考えますか。

女性を悼んで悲しみますか。

女性の冥福を祈りますか。

遺族を慰めたりりますか。

犯人を恨みますか。

女性の死に様を思い浮べますか。

.....。

このお話は、そんなほんのちょっとの感性の違いが引き起こした悲劇です。

この主人公は、ほんの少し周りと命についての受け取り方が違つただけに、間違つた道を進んでしまいます。

その違いはほんとに些細なもので、友人も、教師も、家族でさえも気付いてあげる事ができませんでした。

扇の端は点でも、外側はとても大きいのです。
進んで、加速して、終点を迎えたそれは、他人を殺すという形で爆発してしまいました。

主人公は一体何故こんなにも他人とずれているのか。

いいえ、この主人公があまりにも他人とずれすぎているように見えるのは、このお話が主人公視点だからです。

誰だつて他人とずれているのです。この主人公だけではありません。地球上の誰もが、ずれているのです。

この主人公だつて、甘いものが大好きかもしれない。

対人関係がうまくいかなくて、こんなこと考える余裕も無く酒を飲む日もあつたかもしれない。

耐え切れなくなつて、くしゃくしゃの顔で泣きじやくつたかもしれない。

それでも仲直りして、満面に笑みを湛えて笑い合つたかもしれない。

主人公だつて人間だつたんです。ただ、命についての受け取り方が、社会に居る大勢とほんの少し違うだけの。

だからこそ、幼い頃に芽吹いた狂氣の芽を誰にも見つけてもらえず、大きな実がなつてしまつた。

それはとても醜くて、恐ろしくて、悲しい味。

このお話を書こうと思つたきつかけは、ネットサーフィンの途中で見つけた、

いわゆる「お題サイト」というところで見かけたお題があまりに印象的で美しく、儂く、それでいて強い言葉で、

その時頭の中についた「殺人」というワードと重ねると、あまりにも簡単に話の構成が思い浮かんでしまったことからです。

そのお題とはもちろん、題名になつていて「もっと力があったならば それは己の弱さを正当化させる言葉である」です。

後書きもそろそろ終わりにしようと思います。

最後に、ここまで読んでくださった皆様、話の構成の上で私に協力してくれた皆様、快くお題を使用する許可を出してくださった管理人様、本当にありがとうございました。

いつかこの話の続き、もしくは長編での書き直しをしようと思つています。

そのときは、主人公の生い立ち、友人の生い立ち、一度の惨殺事件、そしてその加害者、被害者、全てを書きたいと思っております。この話では友人や被害者その他、主人公でさえも名前、一人称、生き立ち全て描いておりません。

これは“似た人”がでないようなどいうのもあります、誰にでも感情移入してもらえるように、という願いも込めてあります。

主人公は、世界中に居ます。

誰にも止められず、自分でも自身の狂気に気付けず、最後には最悪の結果を出してしまつ。

そんな悲しい主人公たちが、世界中に居ます。

どうか、彼らを、救つてやって欲しい。

私は、そんな思いを胸に、このお話を書き上げました。

こんなにも頑張った主人公だから。

あなたが主人公になつてしまわないように。

「もつと力があつたならば、それは己の弱さを正当化せらる言葉である」

蓮實苑

お題提供

選択式御題（<http://www.geocities.jp/monikarassu/>）

管理人 最尼花

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5367g/>

もっと力があったならば それは己の弱さを正当化させる言葉である

2011年1月16日08時13分発行